第15回　夏期福音特別集会（鹿沢）（４）

全人――エペソ書第４～６章――（縮小抜粋版）

１９６８年８月25日
小池辰雄

私たちの群れの歴史的な使命は、使徒たちが直々（じかじか）に受けた福音の真骨頂を貫くことです。パウロはローマで囚われていたが、見えざる「愛の綱」でキリストに引っぱられている囚人である。これは愛の綱ですから、「誰がこのキリストの愛から私を離すことができるか」と。ローマ書８章の終りはその絶叫です。パウロは、自分で力を私しません。平伏しの姿、自分に何ものも期待しないところの八方破れの人です。私は今日、「全人」と書きましたが、これは「完全無欠の人」ということではない。「八方破れ」と、この全人とは同じことです。

4 体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同じです。5 主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ、

「一つ、一つ」という。この「一」という渾然（こんぜん）一なるもの、分裂のなきもの。キリストは、「我と父とは一つなり」と言われた。パウロもヨハネもペテロも、「キリストと一つなり」というところに入った。森羅万象、実に数えきれない諸々の現象を統括しているものはこの「一者」である。これが大宇宙を素晴らしい法則のうちに動かしている。もし、その一なる驚くべきものがなかったならば、この森羅万象の在り方は乱れて混沌になる。コリント前書12章に、

「12 体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。13 つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。」（コリント一12・12～13）

「皆一つの霊をのませてもらった」という。私たちのこの体（からだ）はなんと不思議な微妙な構造をしているか。ちゃんと統括がとれている。この「一なる霊」があるからです。この一なる神の霊につながっていなかったならば、人間は行き詰まる。分裂する。キリストが私たちの一なる中心です。私たちの中に御霊として中心を与えてくださる。聖霊という一番深い中心体がくると、ギリシア人もユダヤ人も奴隷も自主もない。人の身体の肢々（えだえだ）のごとくたくさんの人種がある。それぞれの特殊性と役割とがある。それが何によって統括されるか。人間というものを本当に人間たらしめるところの最後のものは神の霊です。「皆一つの体となるために洗礼を受け」という、このパウロの宣言が今、キリスト教界で果して現実であるか。

キリストは御霊のバプテスマを与えんがために来た。しかし、地上にあったキリストは、それはなさらなかった。「どうしても自分が受くべきバプテスマがある」と。それは十字架

であった。「十字架を通ったならば――贖罪の大業をして、旧約聖書の事態を完全に自分が全うしたらば――お前たちの中に今度は入っていく」と。キリストの霊は贖罪をなしうるただ一つの霊である。我々の信仰的現実において「十字架と聖霊」で、私たちは救われている。救いは確かである。これが即ち「皆一つの体となるために洗礼を受けた」ということ。私たちはみなそれぞれ大事な「天下一品」の存在で肢々（えだえだ）です。みなそれぞれの役割をもって神の国を建設し、どのひとつが崩れても石垣が崩れるという、大事な一人びとりです。大きかろうが小さかろうが、三角であろうが四角であろうが、何であろうが一向に差し支えない。キリストを受けた現実にはその「一」の核がそこにある。

「全人」とはなにか「道徳的に全き人」ではない。打ち込んだところの在り方、その時その場において自分の生命をかけて事に当たっている。それは全人的角度という。「全人」というのは、普遍妥当的なあるひとつの型の人を言っているのではない。ひとりの人の全人性というものは隣の人のとはまたちがう。それは千変万化するが、しかも一つである。ダイヤモンドはいろんな光をピカピカと顕しているが、それ自身は無色透明である。根底が無ということ。「無」は同時に「霊」です。虚無ではない。

私たちがキリストの十字架ですっ飛ばされたところに住まいたもうところの聖霊は万人に内住したもう。十字架でちゃんと聖霊の入るところはできている。キリストの十字架を本当に受けとる。行き詰まったら平伏す。自分で打開しようなんて思わないほうがいい。聖霊がくると、その人のいろんな要素というものが、それを貫いて自由自在に表れてくる。人間だから滑ったり転んだりする。そうしたらば、本当にいつも平伏（ひれふ）して行きなさい。平伏すごとに十字架の中にどしどし奥へ入っていく。「我は門なり」の奥に霊界がある。霊界とはなにか特別な所を言っているのではない。この現実界の中に霊界がちゃんとある。日常生活の中に限りなく豊かな神の恵みが見えてくる。見るもの聞くもの体験することはみなその人において化体され体現されていく。私たちは聖書の言葉が化体、受肉する人になる。

6 **すべてのものの父である神は唯一であって、すべてのものの上にあり、すべてのものを通して働き、すべてのものの内におられます。**

超在し貫在し内住内在したもうところのものである。神は一切のものに、万人に、およそすべての現象に在（いま）したもう。パウロにおいて「神・キリスト・聖霊」は一つです。

12 **こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、13 ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。**

この「全き人」（成熟した人間）から私は、題を「全人」とした。私たちはそれぞれ破れ器でありながら、分裂のない破れさというようなのがこの「全人」ということ。その分裂のなさの在り方が自然天然なんだ。「全さ」というのは、全的であって、そこにこそ本当に神

の力、聖霊がそういった魂には臨んでくる。聖霊を受ける体勢は何かというと、「投げ込み」です。自分自身の全存在を投げ込む。投げ込んだ世界には必ず聖霊がくる。

23 **心の底から新たにされて、24 神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。**

「新しき人を著る、キリストを着る」とか、パウロはよく「着る」というようなことを言う。皆さん、「祈れない」なんてことはひとつもない。「わが主イエス・キリストよ、わが一切なる主よ。アーメン、ハレルヤ！」と。これが祈りです。祈りの極致はそれです。頭で考えたらもう第一歩からダメ。「投げ込み」です、すべてが。これが全人的な在り方。そういうようなのが、「新しい人を身に着け」、新しきキリストの衣を着よ、キリストの霊衣を着よということ。霊的な衣を着る。「信ずる」とは何か。活けるキリストの愛を受けとることです。その「霊を受ける」ことを具体的に、「衣を着る」とかいろんな言い方をするだけです。

32 **互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい。**

イエス・キリストから七度を七十倍もして赦された。互いに本当に赦し、また迫害する者のために祈る。愛するとは担うこと。この担いあげの魂は、力ある聖霊の人となったときにできる。この愛がくれば、いよいよもって私たちは力強い人にされていく。５章１節、

1 **あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。**

幼児（おさなご）の如くならなければ天国に入れない、童心を持たなければ天国に入れないという。幼児がおもちゃで遊んでいるときはみな全人の姿です。過去・現在・未来を本当の意味において掌握しているような魂。本当の義がどういうものであるかに貫かれている者、本当の愛がどのような事態であるかに力付けられて底力をいただいている者がこの霊的次元の人物です。「新次元の人物」とはそのような歩き方を、その質を持っているということです。

キリストの救いは私の側の一切に関わりない。ダメなやつこそ救われる。これは親鸞の歎異抄と同じだ。「仏法は善きも悪しきもへだてなしわが本願にもらすものなし」という歌がある。善悪のへだてはないよと。仏法の仏の本願にもらすものは一人もない。キリスト自身が、「人にはあたわぬ分を神はなす」と言われた。「神はなす」ということは、「神がお前たちを通してするぞ」ということ。福音の世界は具体的な世界ですから、我々このダメなやつ、どうにもならないやつをこそキリストは喜んで使う。御意の発するところ、そこに私たちは自分の思いにすぐることが生じてくる。行き詰まりを知らない人になる。「全人」とは、固定した何か全さを言っているのではない。動いてやまないことです。いつも満たされながら、どんどんと展開していく人。千変万化変わっていながら、実は本質においては一つなるものがグーッと動いている世界です。

祈りこそ力強いものはない。最大の力は祈りである。キリストはなぜ、力ある人であったか。彼は祈りのひとである。祈りは神の力を受ける事態ですから。「自分のからだを投げかけ、

全身に受けとる」というのが祈りです。霊界の力の世界はちょうど電波が今ここにきているのと同じように、霊的な波動はもう言わず語らずのうちにお互いに交流している。

祈りが聞かれないことがあっても、実はその聞かれないことにおいて、祈られた以上のことが聞かれている。それが私たちの御意に対するところの絶対信頼の世界です。結果はどうなろうと、そんなことはいい。祈りにおいて神さまと交わって、それが深くなっていけばいくほど、すべてのことが最善となっていくことを受けとっていく。「祈りたること聞かれたりとせよ」とキリストが言われたのは、ただ現象面を言われたのではない。

いろいろな徴をとおして、キリストはいったい何を見させようとしているか。何を与えようとしているか。彼自身なんです。「我を信ぜよ。わが業（わざ）において信ぜよ」ということは、業をただ信ずるのではない。「業において、言において我を信ぜよ。この我を受けとれ。ただそれはひとつの道にすぎないんだ」と。キリストを受けとることが本当の信の世界です。

聖霊が来てから、そこを突破して行ったのがあの使徒たちです。皆さんはダメのまんまで、「我を視よ」が言えるんですよ。ダメだからこそ、キリストは入ってくる。その不思議な二重構造ができている。そこに本当の全さというものが、全人的な動きが働いてくる。

「万象は主に帰する」、一切の現象は主に帰するようにできている。私たちは驚くべき福音を受けるためにこの「個」が**「新次元の人」**に御霊によって救いあげられ、次元の違ったものにされる。次元の違ったものを内に持つ。どんなに破れかぶれの人間であっても、もう本質的に次元の世界が違う。

「神の奥義」とは、キリストそのものが神の奥義の現象体であると同時に、このキリストと結びつくところの「個」と、その個の「群れ、エクレシア」、「羔（こひつじ）の婚姻」という最後の表現をもって言われているところの、「首（かしら）と体（からだ）」の不思議な大家族の事態が「神の奥義」といわれたところのことである。

私たちがこの世において万人救済に向かって進むためには、どうしても最後にそういった聖霊の**「全人」**的な在り方をもって実存していくこと。諸々の霊にとらわれてその手下となっているこの世の中の様々な現象に対して戦っていくことは、聖霊のこの力において神の大いなる大能が、キリストの力が本当に現れる。そのような**「霊的新人」**としての、ぶちまけていくところの**「全人」**の、そのようなキリスト者をパウロはエペソ書において望んで、「必ず勝つぞ」と言う。

どうぞ、皆さん、「何も恐るるなかれ。わがうちなるこの霊に誰がかなうか。このキリストの霊にかなうものが、天上天下いずこにあるか。このキリストの驚くべき生命力、力、愛を何ものが離すことができるか」と。一切を救い上げていくところのこの悲願。驚くべき祈りの担いの人、白熱的な人となる。自在なる戦いをなしていくためには、そのような自在な霊となる。その一点でもって火花を散らして進んでいく。これは必ず人生は本当の勝利です。